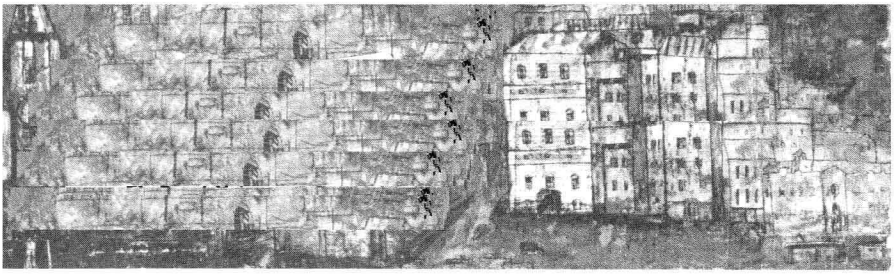
青い光

大岡昇平

新潮社



青い光

大岡昇平

新潮社

青い光

昭和五十六年五月二十日　印刷
昭和五十六年五月二十五日　発行

著者　大岡昇平
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七十一
電話　業務(03)二六六一五一一一
編集(03)二六六一五四一一
振替　東京　四一八〇八
定価一〇〇〇円

印刷　二光印刷株式会社・製本　新宿加藤製本株式会社
©Shohei Ooka 1981, Printed in Japan
乱丁・落丁本は御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

青い光

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

第一章

「そんな大きな愛があるものかしら」

園子は涙が頬に伝わるにまかせながらいった。涙はアパートの螢光燈の下で、青く光って見えた。唇のはじから顎の方まで流れて行くのを、信雄は眺めていた。

「骨をあげるなんて、いくら自分の子供でも」

その日の夕刊に報ぜられた記事だった。ある身体障害児の母が、子のために、腰の骨の一部を与えたという。

その男の子は生れた時から、四肢が萎えていた。四歳になっても足が立たず、あざらしのように匍っていた。腰の関節が完全でないのだった。母親が自分の腰骨の一部を切り取って、そこへ嵌め込む手術をした。

「母と子供は同じ骨でできている」

信雄は説明した。

「そうして嵌め込まれた骨は、子供の体の中で自然に育って、関節を補強するんだ。子供はそのうちに松葉杖を使えば、立って歩けるようになるらしい」

その手術が成功した、と新聞は報じていた。

身体障害児の生れる原因とされる不良薬品は、もう売られていなかった。しかし母親は不完全な子供を生んだのを、自分の責任と感じるらしい。その子供が普通の子供と同じ生活ができるようにと、母は自分の骨を提供したのである。

そのために手術の苦しさを堪えるだけではなく、自分のほうが不自由な体になってしまうかも知れない危険を冒したのだ。手術が失敗して、腰が抜けるか、びっこになってしまうのもおそれなかった。

「子供といっしょに、匍い廻ってもいいと思っていました」

とその三十歳の母親は新聞記者に語っていた。

「人その友のために自分の命を棄てる、これより大いなる愛はない、という言葉が聖書にある」

と信雄はいった。

「美しい言葉ね」

「言葉だけじゃない。ぼくはきみのためなら、骨どころか、命だってあげる」

信雄と園子は一年前に結婚したばかりだった。阿佐ヶ谷駅の北、徒歩十五分ばかりの小さなアパートに家庭を持った。二人の収入を合せてやっと生活を支えることができた。子供を生むと、アパートを出なければならない。権利金、礼金の臨時支出がいる。それはなんとかするにしても、園子が働けなくなる。だから作らずにいるのだった。

だから、園子が骨を与えた母親の話に動かされるのではないか、と信雄は思った。

「その方が、子供に骨をやろうと決心するまでに、いろいろなことがあった、と思うの」と園子はいった。「夫は三十五歳、奥さんは三十歳ね、子供さんが四歳で二人目の子供だというから、結婚七年目か八年目だわ」
「そうだね。例えばほかの女に移っていた夫の心が、このことをきっかけに戻ったとか」
「あなたもそう思う？　不完全な子が生れてから家の中が暗くなり、夫が家に帰らなくなったのだったら」
「そうではないようだ。夫は自分の骨を取ってくれ、といっている。しかし医者は少しでも若い人間の骨の方がよいといったんだ。子供の成長といっしょに育って行かなければならない骨なんだから。それでなければプラスチックを入れても同じことなんだから」
「男は子供と同じ体だとはいえないと思うわ。子供は女の体の中で育ち、形づくられて来るんですからね」
「でも、ぼくには夫が自分の骨も取ってくれといった気持もわかる。少しでも妻の負担を軽くしてやりたい、という気持――。せめて片方だけでも、自分の骨を使ってほしい、といったと思う」
「夫婦で犠牲になりっこするなんて、めったにない機会ね。でも、あたしが医者なら同じ骨の方がいい、というでしょう」
「そういう機会に恵まれたその夫婦がうらやましいような気がするな」
　そんな風に信雄と園子は話し合ったのだった。信雄は二十五歳、園子は二十二歳で、新聞に載った夫婦よりは、ずっと若かったけれど、愛とは二人で育てて行かなければならないものだ、ということをよく知っていた。
　二人の結婚もすらすらと行ったものではなかった。信雄のただ一人の親類縁者といえる姉の幸

子が反対したのは、結局、園子の家に財産がないためだった。
「なにも結婚しなくたって、いいじゃないの。あなたにはまだその能力がないし、園子さんには財産がない。いまどき、男はなるべく相手につかまらないように気をつけてるのかって思ってたのに、そうじゃなかったの」
「姉さんとは違うよ」
愛は常に育って行かなければならない。大きくなり続けなければならなかった。結婚を実現させるため、愛を支えるためには意思が要った。二人の愛はすでに歴史を持っていたのだった。
「きみ、やっぱり子供がほしいのか」
信雄は園子の頬に残る涙の痕を唇で除いてやりながら、そう訊いた。
「あたりまえだわ。小さな体が、あたしの体の中でで き上って、おなかの方々を蹴っとばされるなんて、すばらしいわ」
信雄は新しく涙の湧いて来る眼に一つずつキスした、睫毛を一本一本、舌の先で選り分けるように。そうすると信雄の心が静まり、園子の心も静まって来る。そして二人は儀式のように愛し合うのだった。

「面白い話が出ているよ。今日の新聞には」と男が窓際のソファから声をかけた。
「面白い？　面白い話なんてあるの、いまどき」と女は部屋の奥から答えた。
「ちょっと来て見たら。きみには少し薬になるような話だよ」
男がしつこくいうので、女は近寄った。ソファの肱かけに尻をのせ、男の肩に手をおいて、のぞき込んだ。

新しい住宅地として宣伝されている多摩川西岸の丘陵の中の家だった。ふし目を飾りのように出してヒノキを張りめぐらした山小屋風の作りである。広間の中央に囲炉裡が切ってあり、くすんだ太い自在鉤で、鉄鍋が釣り下げてある。それが使われることはないが、客の目を楽しませるためにかけてあるのだ。

住む人間に、日本伝統の農民の生活感情を味わせるためだと、設計をした外国帰りの建築家はいった。ところがこういうデザインによって伝統は恢復されたろうか。そもそもこの二人に生活があったろうか。

「きみにできるかな、こんなことが」

男の名は田辺公明、小説家である。女の名は塩尻祐子、その愛人だった。二人は結婚していない。この家に同棲してから二年になる。

「自分の子供のために、骨を与える母親、泣かせるわね。少しマゾじゃないかしら、この人」

「なんてことをいうの。世紀の母性愛って見出しがついている」

「女には自分の体を傷つけたいって本能があるらしいわ。いつも男に強姦されたがっている女もいるって話よ、あたしはちがうけど」

「強姦とこれとなんの関係があるのかなあ。団地のゴミ箱やコインロッカーに、赤ん坊を棄てる母がいる世の中に、美談じゃないの、これ。——しかしこれにはとても金がかかっているのはたしかだね。ペニシリンがなかった昔には思いもつかない手術だ。母体と子供の、とにかく二つの肉体の、少なくとも四ヵ所メスを入れなければならない。手術料、少なくとも一ヵ月の入院費、予後のリハビリ、雑費を入れたら、千五百万円はかかってるな。場所は大阪、金のある場所だ。父親は精密機械工場主、金があるからできたんだね」

「あたり前だわ。大抵の病気は金があれば癒っちゃうわ」
「癒るというのはうそだな。症状がより軽くなるだけの話さ。そして一方には金があるためにかかる病気がある」
十一月の末の太陽が、南に大きく開いた窓一面に当っている。そこに一本の高いイチョウの木があって、紅葉した葉の照り返しで、白いレースのカーテンを黄色に染め上げていた。
このあたりはイチョウが多い。秋になると、農家や小学校の庭をはなやかに彩る。この家の建っている丘のてっぺんのイチョウは遠くからでもよく見える。
一つの連続した物音が部屋を領していた。それは地底から響くような低い連続した音で、海から二十キロはなれたこの丘陵地帯の中でなければ、客は浪が長く続いた渚を打つ音、潮騒の音と聞くに違いない。
それはこの丘を貫いて、最近できた高速道路を絶え間なく走る車の音なのだ。エンジンの唸り、タイヤがアスファルト道をこする音が、一つの音のかたまりになって、上って来る。
道路は三百メートルばかり離れて、この丘の南側を切通しで削っている。南の窓際まで行けば、白とグレイに統一された新しい道路が、左手から現われて、広い田園を貫き、向うの丘の中に、ゆるやかにカーヴしながら入ってしまうまで見渡せる。
マフラーをはずした単車が、けたたましい音を立てて近づいて来ることがある。音が急ピッチに高まってから、不意に低くなり、案外早く消えてしまう。
「近づく音は高く聞えるんだ、そして遠ざかる音は低く」
と、この家の主人は音響学の初歩を呟いたが、そのため音がなくなるわけではない。
切通しは一キロ北でなくなる。その方は道路沿いに林や家が密集していて、そっちから近づく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

音は、この家には届かない。たまに重い機械を積んだトラックが通る時、地響きが、窓からではなく、床下から伝って来ることがある。音だけではなく、振動でこの家を土台から揺がせる。

陸軍少将だった田辺の父が、戦後まもなくこの家を建てた頃は、この丘陵一帯は宅地造成の対象になっていなかった。丘の襞の一つ一つに入り込んだ水田と、黒土と竹藪が印象的な田園だった。春はモモとサクラが遠い林際を霞ませ、秋はカキの実が花のように実をつけた。イチョウの黄色を氾濫させていて、季節は寒くなりつつあるのに、風景は却って暖かい色に満ちる。

丘の上に家を建てたのは、なんでも見下すことの好きな田辺の父の性質からである。麹町の家は戦災で焼けたし、彼の属する軍人グループは、敗戦直後は、田を耕すと称して、郷里へ帰ったり、田舎へ引込んだ。

それに見習ったわけではないが、その時、六歳だった田辺も、戦後三十年のうちに、両親が相継いで亡くなった後、この丘の上の家に移り住んで、世の移り変わりを超然として見下すことにした。その時はまだ高速道路は通っていず、ここがこんなにうるさい丘になろうとは思っていなかった。

少しばかり過激な政治性と、適度のエロティシズムと、いくらかの感傷性をまじえた彼の作品は、心情的に反逆と不満の中にいるにしても、結局は自分一人の幸福しか願っていない読者の嗜好に投じて、彼の『丘から見える雲』は一九七〇年代のベストセラーの一つになった。彼がこの家を民芸的に修理したのはその印税によってである。

常に新聞か週刊誌に連載小説を書き、しかし三年に一つは文芸雑誌に安い原稿料で「力作」を書くことを忘れず、ふくれ上った新制大学に講師に招かれれば断らず、文学賞の授賞パーティや文壇の大物の出版記念会には欠かさず出席して、各種雑誌の編集者と当りさわりのない冗談を交

す。そういう現代の作家の勤めを忠実に果した。
その結果は祐子との恋愛事件だった。そのために祐子は夫と子供を棄てて、この丘の上の家に彼と同棲したのである。夫はある建設会社の設計課に勤めていた。事件は週刊誌に載りスキャンダルとなった。しかしそのため彼の仕事の注文がなくなることはなかった。彼は週刊誌のインタヴュに答えた。
「男女の最も真実で合法的な唯一の結合は、愛による結合です。愛のない結婚は桎梏にすぎない。社会の仕来りに従って、神前で形式的に永遠の愛を誓ったからといって、形骸化した結合を守り続けるのは偽善であり、ナンセンスである。離婚率の増加は世界的な現象ではないか。私は自分の行動をみなさんの虚心坦懐、公平な判断にゆだねます」
新制大学の講師を辞任し、向う一年執筆しないと宣言して、この山荘に祐子と二人で閉じこもった。むろん週刊誌から、この大恋愛を小説に書け、と注文が来るのを期待しながら。
『丘から見える雲』はこの注文に応じて書かれたものであった。事件を劇画的なアクションで処理し、丘の上の家から見える丹沢、富士、箱根に連る山脈のうしろから、放射状に延びた雲が真赤に焼けて天頂に達するさまを、SF的なクールさをもって描写し、愛の生活を映画的に謳歌した。
この古風な姦通小説は批評家からは罵倒されたが、奇妙にも読者には受けて、ベストセラーになり、映画化された。文庫にもなって、二人の愛の生活を支えた。批評家から無視されながら、彼の生活は安定して来た。
問題なのは、祐子に子供が一人いて、それを夫の許に残して来たこと。彼女の父は川崎の自動車部品製作所社長で、かなりの相続財産が見込まれていることだった。

彼女の夫は離婚を承知せず、子供も渡さなかった。小説家なんて、名は売れていても、内心では生活の不安を感じているものだ。田辺のねらいは祐子と結婚し、この財産に権利を持つことだ。従って離婚してやらなければ、すぐに別れて、帰って来るというのが、塩尻の意見だった。

田辺は祐子の財産が目的でないことを示すために、形式はどうでもいいといい、編集者たちにも二人が結婚を目標としていないことを強調した。

夫の許に残して来た真佐子について、祐子は次のように説明した。

「子供は元来母親に属すべきではなく、社会に属すべきではないでしょうか。太古、女は太陽であり、母権社会では、子供を授乳するのは母親ですが、教育するのは、母方の伯叔父たちの全部でした。こうして男は社会の戦力に、女は他の氏族との結婚によって結び着きを強める成員に育てられたのです。一夫一婦制は子供の養育の責任を、共同体から単婚家族に転嫁することにより、むやみと感傷的で、社会の一員として役に立たない甘ったれ子を生み出したのではないでしょうか。万事はコンピュータで処理され、働蜂的な青年の大群が要求されている現代の管理社会においては、子供を育てるのは再び社会であるべきだと痛感します。そのために養護教育施設を充実すべきだと思います」

彼女は真佐子の入った湘南の幼稚園のＰＴＡ会長を勤めたことがあったので、こんな理屈がいえたのだが、ＰＴＡでは、無論、子供の教育において、母親の果す任務を強調したのだった。これは百八十度の転換だった。

理論は、彼女にとって、田辺と二人きりの新しい生活、つまりエゴイズムを擁護するためだけのものだった。彼女が子供に骨を与えた母親を、あまり適切でなく、マゾヒスチックといったのも、こういう反応の一つだった。

あれから二年、二人はこのハイウェイの音の聞える丘の上の家で、ある戦前の小説家の造語によれば、ツヴァイザムカイトを楽しんだ。これは一人きり、寂寥の意味があるドイツ語のアインザムカイトをもじったもので、二人きりの、さびしさの中に快楽のある生活を指す。

田辺はアプダイクの『走れ兎』を読み、祐子はサン・テグジュペリの『星の王子さま』を読んだ（彼女は大学では、童話を研究し、戦後の児童文学の左翼的偏向をただそうと思ったことがあった）。二人はそれらの本を、むかしジョーン・バエズの歌ったように、「そこに自分が失ったものの重さをはかり」ながら、読んだのだった。彼等は昼は退屈し、夜は愛し合った。田辺は愛のテクニシャンだと信じられていた。

寝室は南に向いていた。防音ガラスのはまった窓から見えるのは、小さな庭と空とイチョウの木だけだった。月がある夜だと、月光が部屋の奥までさし込んで、二人の体を照らし出した。

ある夜、ふと目をさました田辺は、窓の外に一人の男が立っているのを見た。少し光があった。夜明けが近いか、雲の中に月があるのだろうと、田辺は思った。

レインコートを着た無帽の中年の男だった。空の明りで逆光になっているし、レースのカーテンを透して見るので、顔形はわからなかった。

（泥棒）が最初の印象だったが、それにしては、少し様子が変だった。男は屋内を窺う気配はなく、じっと立ったままである。

（昨夜寝る前に、カーテンを引くのを忘れたらしい）男は田辺の方を見てはいなかった。斜め左を向いて、田辺が寝ているベッドの頭ではなく、壁に視線を固定させているようである。

反射的にそばに寝ている祐子を見た。彼女も目を覚していた。枕から頭をもたげて、じっと男を見詰めている。その眼が少し明るい空を反射して光っている。

「塩尻だ」

田辺は小さく叫んだ。祐子が棄てた夫である。ベッドの上で半身を起こした。とたん男の影は、イチョウの根元まで退いた。それは一人ではなく二人になった。顔は依然としてよくわからないが、その一人はたしかに塩尻だった。するともう一人は誰か。彼等はなにをしに来たのか。

その頃には田辺は、それがイチョウの幹と、そのうしろから低くなるシイや雑木の枝の、影と形が織りだすたわむれにすぎない、と気が付いていた。すると、二人の男の影は消え、イチョウの幹の肌のあやが、夜明けの光の中に浮き出して来た。

鶏の鳴く声が下の農家から聞えた。すべては夜明け時の光が作り出す影に過ぎないのだった。

そう彼と同じものに眼をこらしている祐子にいおうと思い、ふり返った。彼女は向うを向いてよく寝入っていた。枕の白の上に散らばった髪の黒との対照が、暁の光の中で、あざやかになろうとしていた。

田辺は思わず「あっ」といった。すべては視覚の迷いではなく、夢だったのだ。夢の中の映像のたわむれだった。

この頃は、塩尻のことは、半年に一度も思い出さなくなっていた。彼は他人の妻を奪ったことに良心の呵責を感じるような古風な男ではないつもりだった。人の細君とねんごろになるのはおれだけじゃない、と思っていた。

(それなのに、なぜ、いくら夢の中とはいえ、窓のそとに立って、なんとなく咎めるようにこっちを見るのが、あの男だと思っちゃったのかな)

その日いち日、幾度かこの考えが戻ってきた。彼はこの夢を祐子にはいわなかった。「痴人、夢を説く、って言葉があるわね、興味ないな」といわれそうだった。

（祐子も皮肉な笑いを浮べて、平然と、裏切った夫を見ていた）

そうではなかった。あれは夢の中のことだった。みんなおれの意識が作り出したものだ。祐子が平然としていたのではなく、おれが、彼女は塩尻の顔を平然と見返すことができる、と思っているにすぎない——祐子を起こして笑われずにすんでよかった。

彼はそのまま起きてしまった。東側の書斎に入った。そこにはいつも魔法瓶に熱湯が用意してあり、紅茶のセットがおいてある。うす目な一杯をいれてくつろいだ。そしてこの丘の頂上を囲む雑木の梢が、だんだん明るくなって行くのを、ぼんやり眺めていた。

（しかし塩尻の影は、なぜ二つに分れたのかな）

田辺は夢から小説のヒントを得ることがよくあった。行き詰ったシチュエーションの展開を夢に見て、切り抜けたことがあった。漱石の『夢十夜』に真似て、夢そのままを幻想風な短篇にまとめたこともある。

夢の中では現実感があったことも、その時々の身体的条件と結び付いており、そのまま小説になるとは限らなかったが、覚めた後まで、夢を反芻していることがしばしばだった。後日のために、枕元においたメモ用紙にあらましを書いておくことにした。

しかしけさの場合は少し違う。あまりにもいまの生活に密着しすぎていた。

夢の中で、窓近く立っていた塩尻の影は、十メートルばかり退き、イチョウの木の下で二人になったのだった。右側の一人はレインコートを着たままの、塩尻だった。しかし左側の一人は、その顔も服装もはっきりしなかった。ただ人間であることはたしかだった。ところがそのように塩尻といっしょに夢に出て来そうな人間は、彼の周囲にはいなかった。

（要するに、一人ではないということなのか。単数ではなく、複数だということなのだな）と田

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com